

はじめに—中島みゆきと経済学—

15 期生のみなさん、卒業おめでとうございます。個人的な回顧で申し訳ないのですが、みなさんが入学した 2006 年 4 月に、まだ 2 歳の赤ん坊だった愚息は、みなさんが卒業する年には、小学校に入学する 6 歳の少年になりました。

世界から分化した自我

子どもの成長を見て思うのですが、赤ん坊の頃は、子どもは母親や父親から全く未分化であり、それどころか世界とも一体化していた。やがて、自分は「ナオヒロ」という個体であることが分かってくる。よく「自我ができる」と言いますが、それは言葉にはっきりと現れます。「ナオヒロがやる」と言っているうちは、まだ自我ではなく、「ボクがやる」という一人称を使えるようになって、初めて自我ができます。「ボクはナオヒロだ」というナオヒロとは別のボクという一人称を発するまでには、時間がかかります。この一人称の「ボク」が、未分化であった「ナオヒロ」をも、一体化していた「世界」をも認識する過程は、「自立」という成長過程です(埴谷雄高は、それを『死霊』で、「自同律の不快」と表現しました。「アイデンティティ」とは「一体化」とは反対の「分化」を意味します)。

私たちは、こうした成長過程を繰り返して(親からの自立、師匠からの自立、学校からの自立)、「自立した個人」に発達します。それはヒトとして当然の成長過程ではあるけれども、『原初生命体としての人間』(野口三千三、岩波現代文庫)を喪失する過程でもあります。世界と一体化していた状態は、しばしば〈愛〉という普遍的な概念(胎内の羊水の中でゆらゆらと揺れる心地よい動き)で表現され、そこからの自立は〈別れ〉という世俗的な言葉で表現されます。〈別れ〉を繰り返すことでヒトは成長するのだが、逆に未分化であった原初状態、何かへ一体化していた〈愛〉ある生の方が、ヒトははるかに幸福である場合が多いのも確かです。だからヒトは、〈愛と別れ〉を繰り返すのでしょう。

中島みゆきと谷川俊太郎

中島みゆきという不世出の歌姫も、そのモチーフは〈愛と別れ〉です。彼女が凄いのは、それが男女の愛だけに止まらず、世界との「つながり」や、人との「つながり」を強烈に希求する歌を歌うことにあります*。

*本稿は、中島みゆきの〈愛〉の側面だけを強調しますが、もう一つの〈別れ〉側面も非常に重要です。彼女の「わかれうた」は、次第に「個人の自立」に対する応援歌になります。初期の「ファイト」もこの系譜に属し、近年では「重き荷を負いて」という凄いアリアがあります。サビの部分は、「まだ空は見えないか まだ星は見えないか／ふり仰ぎ ふり仰ぎ そのつど転(こ)げながら／がんばってから死にたいな がんばってから死にたいな／重き荷を負いて 坂道を登りゆく者ひとつ／重き荷も坂も 他人には何ひとつ見えはしない」であ

「with」のサビの部分は、「旅をすること自体 おりようとは思わない／手帳にはいつも旅立ちとメモしてある／けれど／with...そのあとへ君の名を綴っていいか／with...淋しさと虚しさと疑いとのかわりに」という歌です。ここでは、「旅」「旅立ち」が自立=別れであり、言うまでもなく「with you」が愛=つながりです。

「二隻(にそう)の舟」は、「夜会」のメインテーマでもあり、7分以上かかるこの堂々たるアリアを彼女の最高傑作とする人は多いと思います。冒頭は「おまえとわたしは たとえば二隻の舟／暗い海を渡ってゆく ひとつひとつの舟／互いの姿は波に隔てられても／同じ歌を歌いながらゆく 二隻の舟」で始まります。「同じ歌を歌いながらゆく、ひとつひとつの舟」です。そのサビの部分では、「わたしたちは二隻の舟／ひとつずつの／そしてひとつの」が何度もリフレインされます。「ひとつずつの」が〈自立=別れ〉であり、「ひとつの」が〈愛=つながり〉であることは言うまでもありません。

私が秘かに彼女の最高傑作と思っている「孤独の肖像 1st.」も、7分以上かかるアリアで、阪神淡路大震災の応援歌としても使われたようですが、そのサビの部分で絶唱される歌詞は、「消えないわ心の中 消えやしないわ／消せないわ心の中 消えやしないわ／手さぐりで歩きだして暗闇の中／もう一度ははじめから愛を探したい」です。具体的なイメージは人によって多様に膨らませることができますが、あるていど普遍的に言えば、「心の中から消えない=消せない〈別れ〉という痛み=暗闇から、世界と一体化していた〈愛〉の原初状態をもう一度ははじめから探すことで抜け出そうとする決心」と読めます。

「銀の龍の背に乗って」は、私も小さい頃読んだ『龍の子太郎』がヒントになっていると確信していますが、「失うものさえ失ってなお 人はまだ誰かの指にすがる／柔らかな皮膚しかない理由(わけ)は 人が人の傷みを聴くためだ」という、『Dr.コトー診療所』の主題歌としては出来過ぎのセリフが盛り込まれています。

谷川俊太郎の「愛—Paul Klee に—」という詩は、これまで書いてきたことを、最も普遍的に代弁してくれます。冒頭と終結部分だけ引用します。「いつまでも／そんなにいつまでも／むすばれているのだどこまでも／そんないにどこまでもむすばれているのだ／弱いもののために／愛し合いながらもたちきられているもの／ひとりでいきているもののために／いつまでも／そんなにいつまでも終わらない歌が要るのだ／天と地とをあわせぬために／たちきられたものをもとのつがなりに戻すため…中略…少女が血と／窓が恋と／歌がもうひとつの歌と／あらそうことのないように／生きるのに不要なものひとつもな

り、「がんばる」というのは日本語で個人の自立を促す陳腐な表現ですが、その後は「死」しかありません。

ちなみに、最初期の「時代」は、「別れと出会いを繰り返し／今日は別れた旅人たちも生まれ変わって巡り会うよ」という、旅人たちの別れと出会いを時間軸に据え、さらに生まれ変わりの輪廻転生歌っているという意味で、彼女にとっても「乗り越え不可能」な(完璧な普遍性を兼ね備えている)歌です。

いように／そんなに豊かに／そんなにいつまでもひろがってゆくイマージュがある／世界に自らを真似させようと／やさしい眼差しでさし招くイマージュがある」。

反ファシズムとしての経済学の規範

ところで、経済学という学問は、「自立した個人」の「合理的な意思決定」というミクロ的基礎(micro-foundation)を持つことによって、価格や利子率の一物一価のみならず、社会の諸制度まで一つに収斂することを、精緻な数学モデルによって証明し、一つに収斂する世界を「望ましい」と考えてきました。その前提は、「自立した個人」が望ましいという近代市民社会に共通した価値判断があります。

私が大学で学問をしようと思ったきっかけになったのは、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』という本でした。これは近代市民社会が保証した自由という重荷から、大衆社会が逃走した結果、ナチスというファシズムを支持する帰結に至ったという筋書きです。これを読んで私は、「自由から逃走」していた我が身を恥じ、「自立した個人」強烈に希求するに至りました。

丸山真男の『日本の思想』も、日本社会の前近代的な、例えばイエやムラとの一体化が、天皇制というファシズムに帰結したこと、そしてやはり「自立した個人」を前提とした強烈な価値判断が語られています。

私は、学問を志した当時も、学問を職業としている今でも、何が嫌いかと言えば、ファシズム(相撲部屋の世界)が嫌いです。ファシズム以外なら、だいたい何でも寛容です。だから、自分のHPに、「私は、自分のまわりの人間が、右に行けば左に行き、左に行けば右に行こうと思っています。これが、私の生きていくうえでの、唯一つの原則といえるでしょう。私は、自分のまわりの人間が、全部右に行ってしまうと、地面が傾いてしまいそうな感じがして、それに釣り合うように、自分だけは左に、しかも十人が右に行けば一人の私は十歩、左に行かなければならないような気がするのです」(なだいなだ『人間、この非人間的なもの』)を引用しています。それが唯一の理由で、私は経済学を「職業としての学問」としました。

convergence と cohesion

しかし、経済学が前提とする「自立した個人」が「競争」することによって、一つに「収斂」するとして望ましいとされた社会では、今「失業・格差・鬱病・自殺」という、とうてい望ましいとは言えない帰結に至っています。「鬱病で自殺」する人は、「自立した個人」ではなかったからなのか、「失業で格差」が生じるのは、「競争」社会では容認すべきことなのかは、議論があるでしょう。

「収斂」というのは、もちろん convergence の訳語です。講義やゼミでも何度か言いましたが、EUでは、convergence と同時に、cohesion が政策として重視されています。cohesion は社会的連帯(人と人とのつながり)を意味し、政策的には格差是正のための地域政策を意味

します。つまり、EU では競争によって社会を活性化するが、競争によって社会そのもの壊すことはしない、という思想です。社会の自然状態を「万人による万人の闘争」(ホッブス)⇒「自由で平等な社会」(ロック)⇒「平和で牧歌的な社会」(ルソー)というヨーロッパの社会契約論の背景があるのかもしれませんが。ファシズムを経験したヨーロッパで、**cohesion** が重んじられることも興味深いことと思います。

問題は、「自立した個人」によって出現する「競争社会」が、ネガティブ・フィードバックのメカニズムを持たなくなったことにあります。簡単に言えば、買うときはみんなが買い、売るときはみんなが売するというポジティブ・フィードバック(バブルとその崩壊)を繰り返し、それを分析的に説明し、有効に回避する理論を、経済学は未だ持ちえていません。市場による規律(ディシプリン)が機能するためには、多様なプレーヤーの存在が前提です(売り買いが交錯する)が、「自立した個人」によって出現したファシズムという、フロムが想定した筋書きから言えば、逆説的な世界が出現しました。

互酬・贈与・扶助

経済学が対象とする取引は、「自立した個人」による市場における「交換」です。しかし社会には、非市場取引も多く存在することも事実で、カール・ポランニーはそれを「互酬」(**reciprocity**)という概念で捉えました。具体的には、贈与(**transfer**)とか相互扶助(**mutual cooperation**)を指します。もちろん、経済学でも、**transfer** というのは「経済的対価を伴わない一方的移転」という意味で、**cooperation** というのは「経済協力」「政策協調」という意味で使用されます。しかし、互酬という範疇で **transfer** を捉えたとき、贈与には何らかの「社会的対価」を伴うものになり(卑近な例では、プレゼントの対価としての愛)、**cooperation** も「社会的義務」としての相互扶助(助け合い)になります。

このように考えると、「自立した個人」から出発し、競争社会を擬制する経済学は、ある実体を伴ってはいるけれども、われわれが「自己責任」だけ果たしていれば良いかと言えば、それはフィクションに過ぎません。逆に、社会的な規範とか倫理とか慣習から出発し、それに対して「社会的責任」をとらなければならない個人を後から擬制する経済モデルも、十分に実体を伴った思考プロセスのはずです。ムハマド・ユヌスが初めてグラミン銀行というマイクロ・クレジットを立ち上げたとき、デフォルト確率を下げるために仕掛けた装置が、「連帯責任」でした。

金融危機後の世界

みなさんが経済学部にて在学中の 2008 年に、アメリカ発の金融危機が発生しました。みなさんは、このことを記憶にとどめ、一体何が起こったのか、その後の世界はどうなったのかをしっかりと見定め、これから経済社会に巣立っていく我が身の糧とし、さらに後生に伝える義務があると思います。経済学を職業としての学問とする私もまた然りです。

少なくとも、金融行政は、自由化から規制へと大きく舵を切り替えることは間違いあり

ません。企業の「社会的責任」(CSR)の一環として、「強欲資本主義」(greedy capitalism)の誤りと、「金融倫理」の重要性を訴えてくるでしょう。その際、なぜ中世ヨーロッパで「高利禁止法」(ケインズ『一般理論』第 23 章参照)が生まれ、金貸し業のユダヤ人が嫌われる『ヴェニスの商人』が書かれたことや、金利の受け払いや反道徳的な事業への投融資の禁止されているイスラム金融も、ヒントになるかもしれません。ともに一神教(善悪二元論)のユダヤ・キリスト教とイスラム教は戦わざるを得ないかもしれないし、ともに多神教(善悪相対論)の伝統があるヨーロッパ(ギリシャ・ローマ神話)と日本(日本神話)には親和性があるかもしれません。

ケインズの『一般理論』からの次の引用は、トービン税のヒントとなった有名な部分です。

「公共の利益のためには、カジノは近づきにくく、カネのかかるものにしておかなければならない。おそらく同じことが株式取引にも当てはまる。ロンドン株式取引所の罪がウォール街の罪より軽いのは、平均的なアメリカ人がウォール街に近づいたり、カネを支払ったりするのとは比べて、平均的なイギリス人はスロッグモートン街に近づきにくく、またカネのかかるものであるという事実によるものである。アメリカにおいて投機が、企業活動に比べて優位である状態を緩和するためには、政府が全ての取引に対してかなり重い税を課すことが、実行可能で最も役に立つ改革となるであろう」(原文ページ、pp.159-60)。

最後はやはり M.ウェーバー

50 歳を過ぎ、あるていど経済学を深く、また広く見渡してきた自負もできました。これからは、やり残してきたことをこれまでと同じく禁欲的にやり続けると同時に、少し専門外にも色気も出したいと思っています。

しかし、これから社会に巣立つみなさんには、まだまだ禁欲を強く勧めます。プロ意識(職業人としての自覚)を持って、仕事に専念してもらいたいと思います。やはり「自立した個人」を意味するウェーバーの言葉(これも HP に引用)を贈りたいと思います。

「専門の仕事への専念と、それに伴うファウスト的な人間の全面性からの断念は、現今の世界ではすべて価値ある行為の前提であって、業績と断念は、今日ではどうしても切り離しえないものとなっている。この認識は、豊かで美しい人間性の時代からの断念を伴う決別を意味した。ピューリタンは職業人たらんと欲した—われわれは職業人たらざるをえない」(マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』)。

最後になりましたが、本機関誌を編集してくれた 15 期生ゼミ長の三木君に、深謝します。4 回生になっても最後まで 3 人でゼミを支えてくれた磯貝君と伊関君にも、お礼を言います。他の 15 期生も、毎年のように(いつも以上に)、3 回生までは、よく学びよく遊んだと思います。みなさんのおかげで、4 回生のゼミでのあり方を、次の学年から再考するきっかけとなりました。みなさんの今後のご活躍を心から祈っています。

2010 年 2 月 20 日 岩本 武和